法華

内閣文庫
番號 和 43391
冊數 2 (2)
函號 特 119 3

内閣文庫
和書
四三三九一
二冊
二〇三個
一七架

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

書籍
一橋文庫
草文庫
和學講談所

花はあるかに。月はそらにあるものゝ
見るものは。ゐるよりあるて月はなし。
さこゝろ。さのゝ小はぎ。波ぬべ。
あま衣。ぬれ。
袖。ちかさ。おりれ。
はあかつき。ゝの。
見よまつはるに。
まぐさ。はるあ。
なぐ。ゆ。
きるゝ。

さてのあるひはいかるるまさどゝまたゝ
ゝまる人ぞ比枝の松ちかり
ゝ。そはんこゝまでは引つめる。茅
の子も始終さうおりゝ。男女お
情をひゝへにあるまでつゝ恨のす。
あはゝやみすゝうはをさひ。あゝまる
奥をゝこち。長歩ひゝあらし。
をきゝ井をおりたやり。海苔がやど
おもゝをゝのぶこゝ。ゝこのむもと
いつゝ。月のをすまさを。ゝ星流か

まゝまづめるうち。曉ちかくまわて
結びでゝ。ゝをゆゝうゝ者ゝたるやう
すて。ゝる家の山の松の梢にみしゝる。氷
苔まの彩うちさゝぐしゝ。村ゝゆゝゝが
ゝれのおゝ。まゝさゝ表ちう。梢葉
さゝゝ。まゝのぬきゝまやうゝる塚
苔土ちきゝめきゝ。ゝるちうまにゝゝ。
ゆあんをもおと赤蓮しう光ゆき。
まゝ月のをゝ月ゝてゝる
ものゝ。書おゝ花ゝゝ。月の

来ハ堂ばうとも者ども
なのもーう和りゝ
ひとへにたゞはるはさみ
はなさも本ふかや。うしのみもの人こう色
こゝ山ぶはもて與ずふ。岩のなるは
ゆびちかつゝちよか。あの〳〵めもびたも
ひゝ〳〵。酒のみ連歌しゝて。はあの者
まる枝ゝ〳〵おゝ。奥まの白あし
はひゝ〳〵して。雪ふるまあゝまちゝ路
ア者ゝ。ふるづの物。よそおだゝ人ふ

ゝ。はやうお人乃祭見しはゝ。ゆ
めづゝうまつき。見ごゝはもうゝ。そ
ゝ。ハ枝おゝ不用ゝ。て。あゝゝ屋ゝて
酒のみもゝの。囲碁双六などあうび
て。棧敷ゝ人ゝ。ゝ。ゝば。わゝ
はゝ。ふはゝ。名所つぶ〳〵やうに
あゝうひゝ。ゝのづゝ。為ぬぶ者ゝ
簾りゝ。おゝゝ。ゝあひて。ふるもみゝ
はづゝとゝだゝ。ゝあゝりゝ。ぬづゝ
ようひて。わゝ。ゝ。ぬ。ゝん者で

といひてまかぬ。たゞ物をのゝしりて人をまる
あるべし。赤の人形はいとゞあれば。
腰をいたゞきもんぶにわゝくまのほうぐまる
は。おなじゝへよりらの人おこうーろにさ
ゝるなり。はゝまあーゝとおびかし
ゝるなり。わがあーゝ人なんとする人あるー。
何とあゝ巻のもわしておやめう
をに。ぬかれぬいどきのびてこをる車
どまの系ーあをたれゝれのまど
思ひよまれば。まる匂下部なのみし

まるまあり。おゝゝもあゝゝーー
もはゝぐゝよりのふるまはをぐく
みゝぶ。まるおどまゝふてあゝべつる車
どもにあゝまみぬるはる人ゝ。いづわゝへろ
ゆきつゝん。おどまゝおれまはて。車
どまの雑うどりーさもまみぬまば。簾
たゝみまゝをけゝうて。自分おまさびー
ばにまわゆくあるう。世まためーまゝ
まゝれゝ表まれ。大臣人たるこを祭人
ゝるまゝいあれ。は物おのおをまゝゝ行

ふ人のかへ―れるず。あすゝてさて
ぬ世の人はをも。はゝはおからぬにこそ
此人あるうきたんのもら。我未死ぬべきよ
宝りうもも。行ぶ明〳〵結つけぬべし。
大なる器よりもの。てあり者宛とあま
りんに。主ぐるる事すれしとふ
ことを。をこるよあゝもゆゝば。おそつき
ぬべ―。新乃中に。あおき人をなげる
ぬ。あるべゝ。百ま人二人のみをんか。
名部野舟器。はゝぬ明少すま見る

はあるゝぬ。あれど。をゝぬぬ明―。
さきば板とひゆゝくものぬりてうらをく
おぶあ―。ゝるれまゝずつあのふと
よゝび。思ひうまぬい死ぬや。ふすで
のゝまはけるあわゞき石思儀や。
ぶ―ものをのどうよ出ぬんや。やく
こゞてとふものを。奴六の石まて出りて
ゝてをゝべゝ新ぶ。ゝゝきんるゝづ
まの―ゝをを。ゝゝゆゞを。うぞへあて〳〵
ひうをりあまぶ。ゝのかいのゞきぬと

ふれど。又こゝぞふかぶかにいづれものがきぶさよ似るが。兵の
軍みあらば。死うちかゝることをおて。
敵をまもりまもりたる人
はるやの庵ぞ。不二に次名をもてあう
びゝはこび給にはやと思へるは。ひとみつ
ま。きづかるひおく奥。元亨のむかしま
きらひをゝばゝんや。をゝ死ものぞめる
る。ゝゝさの体ゝをゝめるまあるべ
祭るぬまば。後の世の芸あらうまちとて。

武人のはは兼ねふとみあさゝめゝ侍也
しが。人もまゝ芸ゝ侍ゝ。まのま
人のをゝるるまきば。はゝべ。
おりしかど。間作内侍が
ゝゝれどまかれ。あきぬいまろ女り
みを芸乃ゝきぬ兼ゝかゝ。をゝめる
も。女屋の一篠ゝ。芸のゝりさる枯葉を
よめるよゝ。歌の系にゝゝか。ゝるき歌
おゝしばがきに。ゝまきるあのはゝて
つゝりはるをゝ侍ゝ。桃園まゝこゝ

ろ〜さえ――まの柏がかきまぜ葉とのる
ることあ。いみ〜〜あつ〜うさえしよか
ま。鴨長明のゆや手あ孫子とをさ
孫子。後汐あふれはとまわらわとぞう
ある。とのれとうあ〜〜ぐたあうあるを。名
殘を〜いづとを推べま。性にう〜れる
くをを。九月九日に菊をぬうへ〜れ
とゝへば。ちうぶは菊はまわまぐ〜もるを
べまをこう。桃柏皇太后あのうれは
てのち。古事清性清内。さうぶ〜ま

ゑをどりらをさうが結わまるはつて。
まわを〜ねねをまをぐうのをつると。辯の
めのとの口をあるを。あやめの草ありあ
をぐ〜とを。口結はぐのよみしづ〜
おはにうをさき水ハ。松はを〜。雲ハ五葉
もよ〜。ふのひとへをれよしハを梅
はあを花の赤にのみあいはるを。比比で
世にあの〜ば結るを。古昭基を。老辺
ひさ〜〜結ひとへまてあうあれハ重梅ハ
こゝろ。ぶう。柏をあ。ひ。ちを〜ゆだけ

そかうくずるもあり。ちん。遠ばくゝゝゝ
まけず。利一の法きさるもあつ。
梅は白きうすゐ梅。ひらゝへちゐぶゝゝ咲
たるも。のさかりあれ。梅はすゝめ
こまもあれ。おの一。まさうき梅ハ。はゝ発よ
はなあるて。ゝゝまもりをはれて。枝
みさだこつきいさゝふうし。ゝゝへ。さるず。
よづさきてちかあるハ。はゝゝおゝゝて。
京極の道中ハ。ゝゝあるひゝへ梅をちん。
軒よりくうゝへゝまさ。うかける。ゐ梅は屋

はは南むをす。そも二ゐ伝るめう。梅又お
う。ゐ月ばかりのやゝゝえですぐゝ美
のもゐ集まるはちゐて。めでゝきしのや。
さら花うゝいづれ。ゝ木ハ。ゝ木ハ。ゝ大なる
よし。ゝ。ゝハ。ゝ梅社ゝ。ゝよりでしこ。ゝは
ハ蓮。秋の美ハ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゐ。ゐ。ゐ。

汐ゆにおれさる物ゝ
てゝ。ゑとゝ見れぬ
かゝぶ。あゝ
ぐひき物ハ。よゝ
ます。はやうのもの
ま死して財殘る
ゆ。ゝゝ物。ゝゝハ
ゝ物ハ。ゝゝ
ゝおゝる。
えめ

ゝるはゝ。後ハ
ゝ。ゝゝん
夕ゝかゝ
か何ゝ
悲田院堯蓮上人ハ摂津の三浦のあま
ゞゝとゝゝ
の事ゝゝ
ひゝゝハ
うゝ
ゝ

赤ん坊をつれて。おれこそ人情を
思ふまゝにさせ。情をあづけ。まべて心
やすくして。情あるゆへに人をふかぶの
る。たゞけいさんをつゞけて。美えりひ
よれこび。ふよくこうけしつゞけ。
とは思ひど。ゆくゝ。ゝゝ。なぬ人のこ
あれば。をのづゝかいとおゝぬるうれか
うるべし。あづまんに戒めるれど。びに
思ひ人をゝ。情をれ。ひとへよまこぐ
よのあるものなるべ。あづめよかいなや

いてやれぬ。まぶうるゆるうまれば人まい
このよ山ゝゝゝ。ゝとゝゝゝゝ。ゝ。ゝ。

が。めくべうあひて。情をいおいすやもとひ
しに。ひ。わもち情ずを芸しの
ば。さて。世の表ハたちぬ。情をきう
いすづものしなくしん。とをうろ！
まれにこそ。芸のあきに世にさるれ。
といひわ。さまあぬべまるゆ。貞
妻乃とさるべ。ハらるものいう益
悲あわちんや。孝なまきかまあ。子
もらてあう。親の志おりれおなき。世と
ひそる人ぞとうづりするとみるず。

ちべておべしおからる人世。芸。芸ろへ
つ。ひ。世ものの家のをんて。世下にされ
るすい降るゆ。をと人乃いまはておりへ
ば。深に悲しるんおやのさめ妻さの
たあるを恥をまわ。おれぬとみもしつべ
ぬるゆ。ゆれば盗人とひさ。ひ。ごと
おのつみちんよ。世の人の織び宮を
めやうは世をびおこまはすりき
ゆ。人頂の産をさと世い頂のいるし。
きいまわてぬをみよ。世おさるべし。

陳餐のるゝさゝあゝぶ。ゆゑの未孫べゝら
ぶ人をゝる去め。法をくわはゝめて。うゝき
ばつみ。なりん子。不後苦めゆ。はゝ
ゆゑ。ゝして人を恵むべゝとあゝぶ。上お
おこわつゝやをはゝ。民ぶ人ので世を
をゝゝめば。下をおあゝん子。疑ひるこべ
のゝび。衣食言ゆ。すゝるうべにぶゝ
ゝ。ゝん人をぞ。おゝゝ。ゝ盗人とゝいふべます
人お孫馬のるゝはゆきのゆみうゝ
うゝ。人のゝゝなゝ天に。たゝつゝり

ゝてみゝれずゝいゝぶゝかゝべゝ。
ゝ。ゝの。ゝ人ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ。ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝのれゝこのむゝるゝかゝゝゝゝ。ゝ
人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
比大ゝゝハ權化ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ。
学のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝハ。人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
柳尾法上人道をゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝふをのゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

上人もとまりて。あまこうとや。宿坊開
發の人まだ字くしと唱るぞやあまれ
人のつるぞ。あすやとまうさうとこゝ見あるかも
見ねたる神ぶ。府生殿ゆ出馬よりも公
ゝ。ことはめでゝきるの所。何字ぬ不せよ
こゝもあまれこう神ぶ——家殿まま去
るつおとて。國侯殿のごうきまるとゞう
つ殿まふを船ぶ西の下野のとこ信形
を。為るりおあるんや。能こてきゝ殿
つもいたはるとうとまこしゝけ去るる
よ。信殿馬ようゆ為て死ゝ久ゆ。道に去
ゞぬゝつ云。神のごゝとと人思へり。さて
いのまゝ相ぞと人のゆ久れば。まゝめゝ表屋
まして。所共乃るとゞ好しゞ。ぬおゆ
を侍やき。いつゝ殿やこ殿ぞ云まる
ゆ屋屋。相表に人を殿て。なのき
ゆゝ兵ぬ殿ゆあるゝ表殿ゝ神ぶ
人深ゝとおゝ。ゆまゝ。ゆまる
あぞと表殿ゝれば。為屋のまうきお
りますすを去ゝ丈まて。うゆまく

あがしるして、ぢつ[illegible]はあ。はを脱まを
あやぢ。ぢぢ。ぢぢ。ぢ。ぢ。

上の世にいやしき人よりゆるさき
て奴あるなりとうるうや天下万物の上
をもうしへども始は不揃のきこしもあり
天下の服強とあやきはんどもそこ人道
のをまてたぐ〳〵是をもく〳〵
て政事をさきば世界わうとすて家
人おのゝもあるる法さのみるべく〳〵
あ人の子自ゆ中にあるすで上ゆおい
さ〳〵ばん義をもをば推ぎを也げみ習わ
でゆり来も明〳〵老人のるをば人まえ

わ〳〵りぶ者泉よ文りさるを。あ〳〵ぶ〳〵れ
ぐし〳〵大〳〵家の主ばかりあて。城
あこう。やまく〳〵あ〳〵すり〳〵名誉。
世俗のるを推りて。生涯をく〳〵ず。
下愚の人まち。家〳〵〳〵〳〵〳〵ん〳〵ろう。
学び上ゆとこそ。そこ報をもちかば見来
なかぶ者〳〵てやもべ〳〵。もとようわ。色
こもをし〳〵てやすんハ。和一のあや
西火ある新弟上人。猶のぐまわ眉白く
深り徳たけあるを。内裏へな

いと世ちかきまでと。西国寺内方にれあり
こうとのたまへ。はやとく。信仰のきそ
あわれなきば。資朝ひくはをよんで。夏のよが
らまはとやはれ。後日にたゝ犬お
ぬすしく。老ぬ。ぶたて。毛げたるを
ひかせて。比丘尼色どうぶみして。ゆ
とて。西府へよりもくれしかけるとぐ
ゐ兼方のの道めしさゝれ。武士ど
もうち囲みて。六はゆへくりくれば。
資朝は一條わうちて二條をよんであれ

浦山し。世うあゝん思お。うこもあ
まり。くしとどういはれる
比人本ものいよ。あすやどりきれうり
けるに。うやものどまのうまおあ
をもをもどちゆゞみうらえうて。ゆづ
くも不具よりやうまるとんて。もべく
にさどもあ曲者や。尼妻をうよき
ぬとて。まもおはまるかゞり。おて
をゝ無つきて。ゐんてくいゞまゝ見ゝ
きげ。たゞをあかよめづゝしゝあお

すぼーしずまりおりたて。浮ひ〜〜後。此
ちうへ来ぬ〜〜。こゝもやうみ曲わあるを
来て。目をよろこび。ゆるゝ。はかるゝわ
ば毒するまちくちと。興をゝおゞゝけ
きば。弟ちうへ〜〜れくるゝ木どもあ。皆あ
ち〜〜をにくわ。さまつぬべまるや
世にきゝゞりんへ。先機嫌をたべ〜〜。
つゝでおゝきるゝ。人の身すまさかれい
まゝゞひて。をるまゝゞ。はやうのあわ
ゝしよりはぎや。但病をうも。子うゝ。

死ぬるのみ。機嫌なり〜〜ゞ。ついで
おゝ。てやむこゝ。おゝ。生。異。國の
うつわらみる。實の大るゝ。ふけきはのあ
ぞりおゞおゝゞめ。ゝ。ゝ。ゝゞもゞこ
おゝゞ。ゝゞちにをこまれゆくものや。
さきゞをゝ信よつけて。ゆゝふしをを
思りんるゝ。機嫌なゝゞ。とゝの
もよひゝ。空をみゞもむゝゞきや。
考をゝのゝ夏よゝ。ゝいて。秋の
くるゝあゝゞ。ゝ。ゝ。ゝゞ。夏世の事を

もとより。夜よりか院より秋いらるゝ。秋は
四季〳〵あり。中ハ月ハ山岳の天象等
と者〳〵まち。梅まつ鶯みぬ。水の集散お
るゝもよづ為てめぐり巡るあゝ。ハ下より
来ぎ〳〵つゝるうり惜ずして為るや。
ひのゐる気下にすうやうるれよ。やちとる
つゝ〳〵ゐるやし。生老病死の輪まる
あり。又是よる〳〵ゐ事ハ為定れる
ゐじであり。死ハつゝでもの〳〵び。死ハお
ようしまゐ〳〵び。かゐ〳〵うしろよ

もよまさず。人ハ死あるうを去てよう
こと去ること急なゝばるよ。急〳〵ずして
まる。おきのひろ〳〵みをもれどゝ。様よう
者みみゐるゞめ
おゐ乃火焼ハ。ゐ〳〵べゐのゐ中ハ。東
をこまふ。常おるゐ也。宇治左右ハ。東
三條屋ゐ〳〵をこまる。内裏まてあわけ
るもやゐれはよゐ。ゐて。他ハへり。華
あわ〳〵ゐ。ゐるゝのゐもおれど。
女院のゐ中をどうゐ。れ家也とゞ

笙笛等を奏し給へる樂器をとりまぜ
ばらそんをなすの中に盃をとりまぜ酒肴出
はいとものれば皆どうそんをすすめおのおのふいは
必ずにかれて来る。かりすまを不基基
感れしとまたべのべ。あのべ中さよ。重
教授一句をとりのれば何とも御後お
文もものゆ。幸分すして多度の酒を
あらんむるもあり。かりみいきぬ文を
ひろげばすし。ぶ。ぬるを考んや。
見ぬ者ぬ。ぬ乃巻地。ぬ文ぬを考

びとも伝おにありて。ぶ。とも孔伝
さ〜ば。怠ろうらみます。基業なのづ〜
海もも〜れ。孔のいさ。ぐ〜と。縄系に座
もば。芸えずして禅に在ふべし。る
理もよか二ぬ〜ぶ。かおも〜ろ中
ざきば。内神ぬ立験を。志ぬく不信を
べ〜ば。あのぶて見そ。ろうとむべ
盃のそなをゆるるか。ぬ〜ぶいはるまと
表人基ねさおぬ。一に。擬當とや
使ふぬそこにうあるなをつるのやはらん

とや清一うべ。はまのあゝぢす魚道や。
流をのこして。に於つきさるにをとゝぐ
まのとゞうおおもゝ。於
みあたゝびやつふ。絵を踏びうはたる
ぶ。蝶とふ日に沙しまぶふとあるやん
夏。あの人あかもゝれます。みをとりふを
あやまりまつり
門に額のくるをうつとりふよゝぬにか。
勘解由小路三位殿。額のくるとの〳〵
をひき。あれ物の様者うまゝゝあよ

や。ゝゝばりうつまぶハ。ゝゝのるや。様者ち
まふるまどりわべし。護摩ゝゝとりふ
もわろ一。為する。祈摩をまるまで云也。
行法も法の字ばまみてうふわろ一。
濁りてふと清水寺の僧正作られき
常ようふるまゝうるのみあやし
是者まはのわは。ゝゝ至よか百五十ゆと
と。時に四月廿七日。ゝゝとまゝへど。ちまきをうち
七十五日おおやうしとぶ。
一通。まるをは仕。法師。池の名を日来

かれつゝそ。まのうちゃのでゐをすまて。戸
ひらあまをゝまゝ。あゝ。あゝ。ゆきのこゝろはる
のゝ。ものれもいりて。ふてこめゝさゝへつ。
こゝろしはるゝれおい。おゝろくゝ〜〜
きこゝまこゝ。まゝろわゝふやて。八ようげ
ゝゝきゝ。村のをのこゝどゝまおこゝてのそゝる
み。大ゝどまゝるめきあゝ中に。法所
すゝりて。おゝをゝもゝちこゝろゝゝれゝ。
以法所をゝゝゝ。ふゝゝ。母廳へおし
ゝかゝゝゝこゝろまに乃ゝ。頭ゝゝるゝ。さ

もて。おゝ獄もゝゝしよゝゝ。基後方の
の當の時よゝゝ。おゝゝゝゝ。
大衡法大の字。点ゝゝゝゝゝゝゝ。
陸陽乃女ゝ。お論はゝゝ。
もゝちゝの道や法ゝ。吉平ゝ自筆の
古文の裏ゝゝゝ。を法関乃孔
ゝゝゝ。点ゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝ乃人ゝゝゝゝ。ゝゝも點止ゝゝゝ
ゝ。ゝゝ集ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。世ゝの陸法人乃

はて淋しく自他ともあはれ失あるかなしき
ものーこゝろをつくる時。くるびのいはゆる
道のあるかとふるまをしらず
まづまの人お赤の人今文りあるかの人
の者妻にりてまをくて又本寺お山
と論しきぬる顕家の僧すべて我俗に
あらずして人なすれるべくもし
人間のいとまみあるかぎりとあるよ。岩
のはよ雪仏とはつもるさめに金銀
様をはらばかりとはなく。豊なるてんや。

とるは似るか。とうまをまちて。
妻妻してんや。人乃家ありとあんて
おどもはよりはること。雪のごとくなる
うちに。はるみまつる甚くるし
道に出る人。あるいはそのあり
まはうみ。表力ごとくすべ
くこうにん伯ゝどもはいひます
出へる。岩のもまれど。よにかろを
見ゆるせ。ゝぬ道乃浦山あるべく
あるうやなしあるのあるばちん。

といひてあわれ。世間者を生出て人
にあるそふ。角あるもの角なくして
けだ。牙あるもの牙をうみいづるごとく
や人としてい業をおこすべき。物とあ能
そばるを法とし。他にまけることのある
は。火をうち火や。品のこころをすてゝ。才能
のすぐれ多るをもて。先祖者を忘れても。
人にやはらかをおとおりへる人。ようれ。こ
業をおもてこゝろいれのものを。内はよそこ
ばくのものあり。ほゝをもてはるを
べ。をこすまみし。人にもひけらるを。
わざ元をすゝめる。こゝに惜いや。
道を深よもじしぬる人。みづのゝあ
きゝをもて流なるれに。志学ぶ情
ずして。後にやはる代るうまし
自老こゝ人の。事すぐれたる才のこ
ゝ。世人の後をも。後をよろゝりんずい
ばくゝ。老のゝうどまて。いはるまいづ
るゝば。さいあれどうまもまゝ神こゝる
にのをあ。世。世事して者よ人ちも

ゐるまゝのゆゑ。そハやゝ
あわてゝ。大ぜいさわぎたてゝ
いひちらしまいさぶらのオ
ときこゝ。なのづゝあやまちぬべや
しばらのよも辯へさゝぶるまでいひ
ゑいあまおもゝに。そのあるじとも
ゑゝぬづ。すして。さゝぬるさゝ
ぶらりぶおしゝまぬべゝを
あゝぬ人のいひきちするまでとあずと
さひまゝ。やあるいは。偏し

何ものの式といふ。後嵯峨の八代
すでい云ばつけるまを。をきかゞまりふ雨
まちと人のやはゆ。建れ院乃
右弟大夫。後白河院お出居のゝちに
うらぶみ。しさるまとふに世のし
をもりかゆるまいにまみまとあらう
ゆ。さるまて。人のゞかゆくはるゝあ
弟や。用ゐてりのくおとをもをうりて
おぶゝ。浮るゞ。人とあらいも
むつう。人とむうたひをゞ雨あゝを。あ

を学問心を発さんとせば学のるさりて
て時をうつさずして学のためにあらず
りしだにいりんをやろしふづの形容す
あんおふ中くうりよりちをいとて
おるべしいよいよ思りん人
のつまづくこていよ志りしかふ
にあるいりんに限するあるべし
万籍の書き眼孝もくべきこと
もくさきよ人の上まりてのどろるあること
しそんアちぬるいよ又ふ
くまこくはおのびをとりのもいを
ことくこうはしし
見びおらふ人の学ふまんとさて
こそをんわるして人の袖乃び孝
ふまくに月ばくばるまに
おやれぬよくおりふ人ふ孝ふ
ふ如ゆくふみくずして
おおやうまれよ
碁盤のもみよ石を
かれまれ石をまだつ

ゝゝびに毒あるものとよくゝんてこゝにある
ひじわめをたゞくまゝにけばゝてたる石ぬ
あるゝ毒のるゝかゝむきて来べゝゝびたゞ
ゝゝゝとゝゝゝ

はとをとて〳〵。昔の袖にわつれいはめるは
はつかつして。ぬれもあ〳〵うれ。ぬり耻
う〳〵やき。このむに。ねこまはぐまば。色
にはなれ情はめぐ〳〵。りをひさぎよ〳〵
して。百夏の声は。隙り。命を失へるた
め。ねぐりし〳〵して。まおす〳〵
ク〳〵〳〵んるはなべ思ふぶ。すまるかく
よゆひのして。なぐき世ぐ〳〵かとも。おれま
をあやまつ。ハ。ふるれ時のさかぐも也。老
ぬふ人ハ。袖神おく。ろへ。あハ〳〵まろろ
ろ〳〵。ぢ。ぢうごゝにまー。いまの
づ〳〵さづかなまば。世〳〵の力ぐまかさ
ぐ。ま。ぢ。ぢまけて。袖ふ〳〵人ぢ。ぢれ
まの〳〵んろうをかり。老て智のわつき
時にまはまるま。わく——て。かろ
ぢ。老〳〵ろのさまるのめ——
小野小町ぐる。まいぬ〳〵はぐかるば。
義へ。ぬるはまは。ぬ。造ゆ〳〵云文まみし
〳〵ふ。此文清行ぐ〳〵かとりふ。説あれど。
言野天皇の御世は月録にいまか。

大はけ。道無沢より
小町ヶ井のあるあ
や。なを芝来さ
山麓にとまる犬。犬麓
麓よりろ〳〵あふとう
るこゝの沢より去る
中よ。道をゝのゝあ
あゝ。是宴の火るゆ
こゝ沢よりまろばし
のまゝゝさばん。何る
きろうきろ人ゆゝい
矢沢まろりをさゝ
世すぬふえぬるのあ
ことるよづ酒ぬ
たるを興とまるあ
えび。飯人の影い
ひろあ人めとりてま
するをさゝゝ。ひあ
飯をうれぶうるは
とぬてをこちあゝ

ふとめのゝこま
んや
まあ。とまあ
て。三のあ
ゆゝとゝい
ぶに宿を
てんとすげを
ゝすぐろよ
人を自に姫人
ゝ。息災なる人め。

月のまへに大ぜいの病人とまりて。お後を
をしびらふ迄ものもいはずなみだ。
はなのしうちぬづ。あるゆゑでおい
ぐ。ぬぐひはなをかひて。はをくひて
ぐやうすして。ぬのる苦しみあるか
けわるくしの大事とりあてくづれ
とまた人をしてうるめをんをるる。益
悲もなく。これ義みもそむくのき
めうあれ。しん人。ものさに別と
思はげんや。人形屋おうゆあ

あまりもいきをよ形人るゆて傳や
しんふあやしくく不思儀よおぐく
ぬづ。人の上ぬてんさるだいう。
さのくるはゆよ心にくしとあ
人ゆ。おのふにおもやしたのくこわ。羽
おおく。ゑだうしゆゐみ。ひもりづし。
ぬぐたくらげてこよういまの事人。
日本の人とも笑くぐも。女八頭髪ひも及
ちて家のやり。よばゆのくびの形うらはく
ゲて。うちわくひ。盃もてるゆにより体

まことにあぬ人はけうなぬてにはーあ
てみづからもとこれ名
のあるはなあしき事
のあり出ーて名をうるはまれ自老
らこはかりかしーおさきてねうくまのさ
おさまとそうぬぞそて用もあてくきば
すぐおこれを真しるる人はべらしまま
ーーくすくしあるハスこ面まいみぐ
きるどもあくハくふくこ家のるこあハ
破なさーードおさの人はのあれはさう
ひて法ちおまううーー能がおのしく

いうあるのみまて以そハゆる法ぬぬどま
とこーーとて孫よおが為馬車ようの為
てあやすらーーつ物すまの〜ぬを？
大孫をようがひゆきてついひぢ門ガド
などにおきて己あいあるのどもとちく
し己老加裏沙裏のまこ法ガ乃
ゆわいのこまをさこやえぬるどま
ひて己ろめきさるいるのハゆしうる
るまーてまこ世も浪のあまり巻こぐま
ガどまこバつぐいちんこ世まのあやまち

おおく財を失ひ病をすうく百貫の出
とゝへど多の病ハ酒よりあるなこと神
憂かまるとゝへんどゝ藤永人ぞ過すし
うはなをもとゝ出ゝ来ゝ後の世人の
音恵ひこうゝ出なれ基根なやゝ
火のごとゝゝて悪をすし多の毒を
破りて地獄よおつづ酒をとりて人
を飲をだる人五百世ゝ百貫あ来ろう
せるとこあ仏ハ祝ひのあさ
のくらゝおゝとゝ神のお物なれど多の

づゝ拾ひときおまつづ月の来
雪のあゝふのゝのおすてゝ
ひゝすゝて五おゝ與ハ
そふるかゝせうれゝくあらはとゝのかな
あのゝきて多りをとゝなれ永まゝなゝさ
むゝなれくゝのゝあゝのゝ近藤の
中よりはくゝものみきなゝ出やうなる
毒ゝれゝて出れ多ゝゝよゝ
みゝもゝきゝふて火みて出りなゝ
てゝゝゝゝおゝどちゝ神ゝて

飯さるいとおり。藤のうち屋敷ひなが
ら。ちかくなどりて。其の上
ゆゑ。飯だるまおう。いろうりむ人の
主の殿れくの。しかるもいなを
を人のとやまて。上をくあり
などのゆすこもうれ。ちづの
すこ。家人ぶ上戸ようくら
なきぬる。又こう様しぶ。ふるへど上ぶい
おのくゆ罪ゆるさるまあ。藤を出て
あはい言ゐるにと。おあ
たるよ。おどひておりれこうなぶ。
おろ家もどりはし。ねもまあへ
ぶいぶきもらひぶきろひてにぶ。
とますぶ。若うしろもなひ。
そまぶのおぶ。おのくつぶいぶ。
墨戸。小松作門位よつるをゆこ。者
たぶ人におりまし時。まのまあ
ゆ出おゆし。をちをゆぶ。ゆよ
いるなまもゆる。月ゆ。仲菊みと
ぶまきぶ。墨戸。ふどう

鎌倉中をまはりて。こゝに鞠あり。まるよりみち
て後いまゞ夜のあかつきばかりなるに。いづ
ちゝと沙汰するほどに。赤原野の道
紙ばかりづゝを車につみてゆくとあり
ければ。流石のまづしれ
さうりなれば。夜にはおりて
しも人越じ。あてもなくゆくあるま
ものゝ。ゝゝゝ出ゝゝゝ。吉田中納言
ぶの夜をまなびのとうといやはをうちなるゝ
のまいらわしぶ。ゆづりきいみじ

おりたる紙のゝづゝ。賜ゝこゝやうの乃る
や。夜はる儀を吉まりまる人。うは者を
なごはすうゝるはゝ。れ寅まちどう
夜にはさまゝひどゝ。内侍ゝの法神樂
をうて人にのゝるゝて。宮劔をびゝ人ぞ
もらはるまるとて。ふをやて。うちなるは
奇特中ゝ。の屋はゆ行。幸ゝまは。書仲
屋のは細すてあうあれゝ。ゝのびやうゝ
いれゝわゝ。はすくうち。ゝの人みるま
曲結まうゝまゝゝとや

の家に沙門道眼上人、一切経を書きし
こゝにはべりあり。やけ野とぞいふに
あらず。しかして、背摩崖経を海
じて、彫刻せるなり。こゝをたに
さきしに、永久寺八大山ふもとにあり。
江州の伝とて云つたへるなり。西遊傳
法顕伝などにみしばしば、文にはべんなり。
江州はあるべき才学なりやあれども
学者多し。唐土の西域にはふかむきの
論なり。さやうの

はぎたちやうに、正月よりあるぎたちやう
なり。さこそ院よりの。神の奥井荒へおし
て。橋あどるや。法成就の池にこうめ
まもるといふ。神の井荒池をいふや
みれくこゆき。白んばの乃去ゆるといふる。
まもつきやうれさるに似るゝ神ば。梅雪
といふ。さおれ梅雪と云べきなり。あやまり
てさんばのといふや。家のやゝ水のまりまと
うたつづ。とある物語ちかき。者よりの
いれるあるあるや。ゆるる虎おはおゝお

りしまして。ものまゐりのく作りき
はるよし。續此典侍日記に書らゐ
の條方四を隆親卿。ゝゝばけと云もの
を供はよりゝもゝしゝかはるを。うゝあ
やし此物。系るやうあゝゞと人のア
まるとやて。大四を鮭とゝふ魚すいゝぬ
るすてあゝんにこあもあれ。鮭ゆ去ゝだ
ゝ何系るゝあゝん。あゆの去ゝだゝ
ゝゆのいゝ鮭ぬのゝとやゝはれゝり
人はゝ牛をび角を巻ゆ。ハゝゆ馬とび

丹をきゆてゝのゆゝるゝしとゆ。去るゝ
をゝけずゝてゝ人なばやゝゞゆぬるは。
ぬゝのゆゝぜゝ人ゝゝゆ犬をび去れゝふ
ゞゝゞ。ゆゝみゆとゞゆあゆ。ゆゝの巻ふゆ
相撲ゆは頼ゆゆ。松下源左とゞゆ
はる。ゆるゆゝいゝゆゝるゆゆまるゆ。ゝと
けたるゆゝりはうゞしのゆゞれゞゆを。
神戸人をゞゝふゆゝして。巻ゆまりゝて
ゝれゝゝゞ。ゆうとゆの條分四義系をゝ
ゆのゆいゆゝゝてゆゝゝゞ。ゆゝゝかゝてゆ

の——男にくらべられるのは
はるかに劣るとやさきくれば左右
ぬつにもものなりは倍々として
一ちづゝくれるを。はるかに
へいりんは。ふるうてあやをゝしづ
まぐらはゆめんぐるしくとかり
やはれくさげ。左右に倍ふさはしくとかり
へんと思へども。ふかぶかわ。ぶとわかて
きべまや。他に破れ角ある二ぶりの中と。海理
——て用るるぞと。ふるを人にんをゝりを

て必つくんためや。ときやはれくるふるさ
ぶるうくるを。世をおさむる道俵紡ぬ
ものを。女性をれども重人の心にかよへり。天
下をさまつ雑の人を。子をてまるまるる。
深に。ぐんまるあゝぶりけるとぞ
陸佳奥ものまぶ盛ハ。ちうまの馬のか
まりくるをひぶ生さとまるよ。宮と
そろへ——まみとゆゝりとこゆるば
ろてハ。見ハ。はめる馬やゝ。強と墨
へさもくるを。又宮なのべて去きよ謝あ

てゐまぶ。はそハホぶ〜〜してあやまち
るべ〜〜て。の〜〜ぶざ。ゑ。ゑを考〜
ばん人。うじの。ゑなたれ。ゑんや
吉田。や馬乗乃。や。清〜に。ゐることよ
こ。ものゆ。人の力あ〜そふべかぶまと
おべし。のるぶまるゆまび。ゆづよ〜〜ん。て。
強弓に弱きにを。おべし。次よ。嬉物乃
具に。あやうぶ。や。あるとみ〜〜ふよ
ゐ〜ゐるあ〜ぶ。ゐ〜ゐるよよべのび。比
用ゑ。ゑ。ゑまばる。と馬乗ふとは。や。ます。

こ。ゑ。物。歳乃。ゑ。や。と。や。ゑ
ゑ。のゐ。ゑ人。ゑ。ゑ。ゑ

因果の理なを去ては。法師おどして世も
さらんあつれとこそ。おもへいとれば。教の
をしに。法師はみな。ひとりもんたあり。先馬は
乗おもひ。ひとふ。興車いきぬ者の。道
所に補ぎられんは。なをどあるべきなを
ようもんおもひ。りまて為あんは。
うるべしと。云ひ。次に仏るのち
酒おもひ。ひるあんよ。法師は先
下に結おまい。檀那ときはすべく思ふ
べしとて。早歌と云ことを習ひ。

二月ばかり。やうくゆうにのくきぶいく
くよくきくくいえくくく

れば。月日を送るとぐ。まもなく。あ
なくして。あ。老ぬ。後に世の上をよも
ぎれば。思ひ。やうよ。ものもとぶ。物
をぶらぬ。へさきぬ。ぶ。ぶ。ぶ。
て。松をぶる。松のごとに。義へゆく。ぶ
ぶ。世のうらもあ。ものつ。ぶん
るの中よ。いづれ。ものるとぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。べて。ものの中を。楽じ。ぶて。ぶ。
かいぶ。ぶて。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶの中。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

しくあゆみて。あやまちぬるまたは
のべまくし。是をも推はかるべきを
さいなんをおのれ心にのみ思ひ
もうしまふべき道や。来りしとも人い
ねずして東山の月雨かてに。既にゆふつきかた
とも。西山にかりくもり。道はたるべきを
思ひえ。ぶつかりて西山へゆく
べきや。こゝますできつきぬまぼ。此こゝをば
共しひてん。日をゆ。ぬるまれば。西山の
るか。うつてスまうさんたくめ。とおもふ

れよ。一時ばかり。怠すまはたち。一生の懈怠
とおぼゆ。是をなうるべし。一事ばかり
はんと思ひ。他のるの破れ。まゐるを
べかべき。人の影をも恥べし。あるる
みりべずして。一切大るはべべ。人の
あまるのまるまるまる

あるこうしゆへは舊のるゝあひにわ
べ法華のぐわ経やのゝん。といひまるを。
あまわよ物さはぐしー。面白てこそ人
わいひたれば。世ゝ下部あ事をおかゝ
ゝ。物ゝ。人の意い。面乃ハ。やとも。
ものゝは。こゝ。ま。ま。ひぐわもうゝ。ゝ。ば。
さゝてんゝ。ゝて。ゝ。ゝりおてり。ゝ。習ひ
ゝ。ゝ。ゝ。

きのまゝかのこゝのめしよせ捨さぶら
ゆくのをおもふよ。なのづゝこずゆるるを
あれば。ゆるくぬいこがさし。ゆこをといひ
ぬるのゝ深すてこずはず
事とふ物こそ。なのこゝ指すぎき物
さるまゝ。ほも越ぶみてまで上方おそ。
ゆるくこれ。後ぶ情ぶぬとこを。
又めるゝめとぬすへこゝ。お後をやつれば。
元不にゆをとちを殺ゝ力ぶやゝとあるる
あるめとゝ。とおりこれはぶわておうこれ

ぬゝゝめと。殺ゝさおしりゝゝまこのあの
女ゝゝば。に男をぞ殺ゝうゝゝ。てあ
仏とよもうぬゝゝめ。ゝとへばさぶわにこう
と言ゝぬぶ。よして。お仏うちば
とこまれおちめさるめ。ゝとに男。ゝまど
つゝゝまて。ゝ。ぶの妻しゝゆうし。
男ゝゝまて後。ゝよもゝゝ。ゝまうわ
これあわ仏。ゝ。ゝの男ぬすぶ。ゝ。
ゝる女成ゝゝを。ゝ。ゝうれゝんよ。ゝ。ゝぶ
きゝゝゝゝうゝゝん。女のゝゝのゝゝ

にこまかなめしようなどをすぐ通れ
をすんこまこ人間月へとしたこしぬおぐれ
とも所々あらはれまきとすや
四なるどもんいめづらしうりぬべし
家にのて物乃八へまもとふ人いとは
おしいものもの〳〵きのばっか色なし
も夜のみまうめでたくなき書はしろう
ぜおよまけこまれ海まてもまきん家ハまま
屋くこいのやっまれはうぞくいもよ
人のたし家と家のおがぐよまは

よくこ物にこまれ書ものくるてやこる
用こまあるはよこしまるひものくるる
ま〳〵ぐ家ぞひもまいめでくまはして
こもあるこのまの家こうちを文てすいまる
人のをよまをまこるはおし魚りもよ
号れどらいとぐまくんる人は時をも
わるあ物をれば〳〵たうらもまぬぎお
学ぞけりれこくひ東つくろふすり
きよもの男形日書てぬするし女と家
るくこ雑よもべりて強ものて新なぐ

はるかにおもひおこしおはりの孝
孝佛するを人なすうぐぬ。夜まりか
ゝることゝ――
くゝき人の人をはぐくみて。て智をさとさ
と思りん。市ゝにあゝらべ。てあさ人
の業うるばかに。ゝゝゝみあは。
すこまの人の比義をあらをおをんて。
己が身に及ばずとて。ものの道のゝゝ
みに。世をそこば人の言ゝばるをんて。ものを
をぐれうかと思りんる。火をる限りある

づ。ゝ字の法門。晴神の法門。ゝゝび
より。て。ものれに去ずる思ふ。世ある
ゝび。ものを。境界をあゝゝ。ゝ。物をび。
あゝそゝびゝ。ゝて。世をべのゝび
道人の人ばかる眼ゝ。ものしまあやゝ。
言ゝべかゝ。ゝをべば。を人の。世を虚言
をゝをの人生。て。人ををんゝるあり。あゝん。
すあゝをまこゝをゝて。ゝふをに。りゝ
ゝ人あゝ。あまゝに。ゝゝ。信をおこて
をゝゝゝ。虚言をゝををる人

あり。又何とも思ひぐ心をつけぬ人あり。
ゐいはゝゝら芝来まゝゝあるゝゝゝ

もうかにてまゐりしをくれぬべし
おしてあきらのたゞ人なり。まゐる
戒をなんこと。掌の上の物とみん
ずめり。位やうの物を捨りもつて。佛
法やうでとなびくへきなるあらず
女人久遠縄を通りはるよ。小袖に大
口きる人。未造の地なを田をもの水
まをしひらして。会伝にあらんかこと
ばくるはよ。將軍の男二三人生まれて。
こゝをおりおしくかゝりて此人を具

していにくゝ。我内おほれまてぞおそ
まる。義光におりおしはるはい。
神明にやんするあまを人をておりくゝ
奈良火事の神興。東寺西宮よりの御
屋の時。源氏の公ゝすいゝれはる。此屋
大物をてはたをくれくゝを。赤い相国。
往所をてをを踏はいつゝ。侍るべをん。とや
さきくれば。侍をのとるをすひい。兵ほの女
ゞ去年よりとばかり公をくりはゝ
侍をゝ侍られけるを。此お国。みひ物を

入て。西方の法をこうしたしばしつかれ。
眷属共悪鬼悪神ゆゑ。神ばかりおろかれり。
神社すてたとたさ宗ばかりつべきの理り
あやとどうおおもしひしまる
法主の僧のみあるべず。宮頭のみ
強とつふる。延喜式をみしるべ。すべて
家ばかりやうまれとん人の通号にあり
掃名分にかぎるべ。掃名目といふもの
もあり。政事要略あり
掃川行宣法ばかりはいと唐土に
乃国々。律の音ばかり。和国にはなし
神国すて。皇法なるもの——とやあ
異行い。除ありく。何行ハ業なろう。
法海よりまいはい行。仁寿殿のあ
によりてうへ。きこしめ。異行まつり
延元下乗の辛未。赤潮。かきはは下
乗ふ。内おれ。延元ばや
中月を神元月と云て。神るは
ばるべきよしハ去るしまれ。
もと文をみしず。但当月祓社のまつり

事なれ。此名あるゆゑ。此月美濃の神
達。大神宮へあつまりたまふ。故に神
どもの法あり。ゆゑあるをもつて伊勢
まいりに祭月とも云べきなり。その例もな
し。十月法社のりまきの例もなし
したがつて おのおのの不吉の例や
勅勘おこなふ。勅のごとく法社をいとなむ
ものを人なし。をのづから世中
はやがしきはいかなる天神に勅をゆ
ゆるるゆゑにやあらん。勅
かんなづきにうつまる神や。おのおの諸国の
負負の勅をもつて来に帰りたまふ。
人出いでば。此ごろ孫て後。この世をすは。
身をつくることにあらずして
もつてうつ時は捨置るもてゆるはば
ものゆゑ。捨置の損とよまるる法なり。
をやきまへ去れる人なり。
此叡山は。大門勧請の地蔵とふる
は。為恵僧正を始めおはせる地蔵
とふる。法曹ものの沙汰なり。

いすゝへ行墨代。すべて此時分は
つまこまかゝ敬いまゝ。此代にする
流行きたるゆえ法合なる決よ織な
てゞ。の物ゆゑけゞきあるべし
徳大寺右大臣。摂津の国の當の時。
中いて。皮藤次郎浮ゝとこかりきける
紙よ。お人さま兼ゞ半よれ〳〵。藤乃
うらへのて火理お座のすまゆの上に
のゞわてよきうちうみ〳〵川ゝりゝ。
なもき性異ゆゑて半陽国のま

とべつのなとべまよし名やまるを。なお
相国やわて。半よ有りのち。宮あれば
いづくへのおがらば〳〵ん。母弱のお人。とす
くお仕の術半おさ〳〵るべきやうゆ
ゆて半をバ立よへ。川ゝかけるたく
みまびかへ〳〵に〳〵お。あて出るゆうち
けるとちん。あやし。みとゆてあやしま
ざる時。あとゝ。うて破るといへう
長山川ゝて〳〵れ人をて。地びひきける
よ大なるとゆゆ。のびずも考びこうゆ

まをたる堀あり。此に八神まつり
いたてしをおしをやりくれば。つぐあり
ぐきと動アあり。くるに。ふるくすかし地を
きわさる物あり。ばちうきあるまてくれ
ぐさしと指人やはれまる。此おとぐ
人。豆出ふきくん虫。豆屋を建くれん
よ何法たりをのきくべき。鬼神いき
てまは。ゆぐむべく。ぐぐ。ぐぐあり
捨ぐ。とアさきくりくれば。堀をくづ
して蛇をば大井ほまよ。ぐ。てぐ。

はくうたりをうりくあ
強久をの細をゆに。上下ようさを者
まちぐべく。こまどぢお中ようわあの形を
よこはアよひの出するい。夢のるせさ
やうにきくくば。夢岩龍弘毒傳を
ときてあをさくくふ。夢ばばやうのる
や。りをすくし。うるりくふたぐくく
とまをて上るの下へ。おなのはたをはしを
さむぐ。さやあれくわ。みるを人をて
やうのるを者人にをん傳かくるく

人の田と稲ぢるものうへにまきてぬ
さはにとる田をうらもとれとて人を
つかひはるよ。先ん道をぐるの田をさへ
うつもてゆくを。見こい稲じねあ言ま
あ〜ぢすいうにのくいもいひくきぶうるもの
ぶまうとこにゆくてまぶうるべまことりがな
ひこ稲ぢます。降雨ちんとこまるまる者
まればいぢ〜なら〜ぢ発ぢんとぢりいひ
ける理りいるおりうとりり
奥子多ハ巻のものまるぢわいひて。あ

まは鳥さこや。はぢうこまるもるものまる
あるさこ云ものかまるよ。奥子多まる時招
魂乃法をびをこまるふ次ものあり。ここ神ハ
鴉ゆ〜方巻巻のゆ巻歌ゆ。巻多つを
ぶきまる日乃をぢつぢけうり。鴉多を奥
子多のこもはまにつよたてきこゆ
巻ぢうハたりむぢぶび。まうのまれ人
はまうく物とまゆへに。うこいるる
あう。ものおのあうとてるの辺べのぶび。
こまの物巻なうぶ。財おうしとて教

べかるべき。時のまよ失ひすべ。才あり
て頼べのべ。孔子まはりあり。陸
あかりて。おべべ。孔子回まわ苦あり
まず。君の器なき。べのべ。孫とうる
事。世ゆ。ぬきべ。べてかとべ。おべべ。そ
ひきりる。事。ありん。人の志をもつむ
べべ。べ。ぬ。ぬ。ぬ

わうばんん人ハ。先ヤ
はおの大将に央をく時ハ。大ハ
くまさむるあ。らわるけよかくごとに
うつをづ。はれハこそびおちあやうよ。
ハ。て。炭をつもべまおまわ八幡のこ年
に供ゑ。の人。浮衣をきこ。ゑまして炭
をはくきれハあるこ。戒の人。白衣
地獄をさるはハ央ハ。をもちのこ。をる
——かぐまおとや。はれ人ゑり
想夫恋とふ樂ハ。女男をこ。ふれの
名まいあ。ず。ゑの相府蓮。文字のわる
ハ。や。番の。ゑ候ゑ。ゑとして。ゑにまち
ゑをうへこ。妻をし時芸樂まわ。ゑを
よわ。ゑを蓮舟とふ。廻ゑも廻鶴
まわ。廻鶴。てゑ。美乃ゑ。ゑ園あわ。
て。美。蓮に伏——て浸りまつこ。
なのわ。園の。ゑを。農ゑ——や
平宣ハ朝臣。老のくちむ——ゑわ。
最ハ。ゑるのゑこ。あるよひのちゑこバ。
るゑこ——ゑ。おこて。ゑこや。ゑ。ゑ。ひたれ

ひきて。とる〳〵。もし一ぱう。又は三ぱう。直垂などのさまゝあるや。家ごとにばゝとやうまちさゝや。〳〵。ありしのバ。なべ。直垂。うちくのすてまうちわしにて。うしようけとそへて。もてづゝ。此酒をひたゝうべんがはうぐ〳〵。くれバやはるゆ。はつかまうなゝき。人はさづまわぬあらん。はつぬべまぬわあるとゝ。いぢ〳〵。なでも来めぬてあわしぶ。さう〳〵はして。ゐきくよるめ

程よ。堂三の棚に小土器にみそのゝしつきいさるとん生〳〵。こゝにそもあれてさゝるもやしうばゝ。すうりなん。〳〵。ゝよ〳〵。系献よ及びて。興ゝいれ佐やき。も世ものくこそ佐しのもやさきま最ゝまるゝ。鶴器の社系の次に。器ゝ九馬の道の神へ。供えは。ゝ。ちゝ〳〵きさゝけるよ。あるゝじやうゝくれうける。摂。献にうちあゝび。二献よゝび。三献にうちいるもやゝ。ぬそこ座する。亨三

夫婦・隆辯・僧侶あるじ・其の人まで
座をもうけ、そなへ、さて、毎年なる定例
の際物・品々・あるいは、とやはれ、れば、用
こしさ、つる。さて、人々、この物三才。
おすてめ、ものどもに、小袖、ふてうさせて。
後につゝいはれ、そなへ、その時、こゝ人、
おのくやで、はしが、指り、侍しや
長大福長者、人は、長者、はしを
きて、ひこつる、はをはこべ、也、よび
していこるひ、あるのみを人
も、徳、つゝと、思ひ、べのこゝよび
をいづひを、はりまづ、ふと、云ハ。
他ことに、あゝ、人、日常、のおもひ
り、任して、うつみ、世、を、見、
あり、あれ、日、本、の、用、也、次、第、
の用、かゝ、べゝ、人、世、ある、自、他
つゝに、形、量、や、欲、に、ゝ、志、
ひと、人、思ひ、百、万、お、錢、
形、を、任、べゝ、に、形、や、時、
はつゝ、あり、振、り、ある、財、

りぞりあるあるに志ある人にあるべしべし。
に所いるきばるあるべし。我をおろがす
べき悪会きるまもと。うくはくはくは
まうれくゝ。小要をまきまたべしべし。次は銭
を奴のごとくくして。使かれたちぬるものと
ちくゝ。まのづくゝ貧者とまあるべくくべし。
君まのごとくくゝ我ごとをたれこうと
みくゝ。志をべもちぬるこもまれし。次は
恥にのぞもてふとも。怒りうくむるう
まうき。次は正直あくて物をうくゝ

をべし。此日義なまをりておとをもあん
人に富のまるるあるまるをつきに。み
のくぶれるにまるのごとくくまるべ。
銭つもてつきるるは家飯者色
をこもくもべ。在にをのばくず。に所と成ぶ
ざれどもに。とてまへをもくくのくと
やを。抑人に所をぶぞんじたあを。財を
求む。銭を財とまるるに所ひとらまふる
ぶれを。に所まるべをのをへべ。銭あれど
もちぬばくんに。食。貧者とおるべ。

何をつ〻ぬけもせんぬけなまてハたゞ人ら
の恥ばかりて貧ゝ憂るべきとき
こゝろが欲なばじてゝのーひとちん
よかハ者のゞ財ゝるゝんゝゝ癡狂は
かゝ者ゝ必ゝ陸ゝてゝるのーひとゝ
よかハやゝばゝんゝまい者ゞこゝにゝり
てハ貧富やゝにハ好ゝ寃者ハ理ゝに
ひとゝ火欲ゝ世ゝ欲ゝ似ゝゝ
ゝハ火にゝひつゝくものゝ堪川ゝて人
ゞ捨ゝる寃ゝ私ゝ自ゝ仏ゝ寄ゝて。

歩ゝ出ゝるのゝおゝをゝとゝおゝる不法ゝ所ゝに私ゝ三
飛ゝりゝてゝこゝひつゝきゝれゝバ力ゝとゝあゝさて
見ゝとゝるゝゝゝゝゝ私ゝこゝ三ゝ丈ゝをゝはゝゝこゝひゝつゝは
つゝいゝこゝろゝ——ゝゝ。こゝいゝゝすゞゝゝ。法ゝ所ゝハゝゝまゝる
にゝくゝれゝゝゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝ

中の穴は平調なり。右の穴は下無調也。右の穴
に鳴物調をとゞめ。上の穴双調。次に
鳥鐘調をとゞめて。夕の穴黄鐘調也。
其次に鸞鏡調をとゞめて。中の穴盤
涉調。中と。のとの間。これに平調あり。
やうに穴に指一律をとゞめる。五の
穴のみ上に穴なし。調子をとゞめずして。去の
もちをくばるゝ。ひとをもつて其声
不快也。もしバ此穴を吹時。あの〳〵おけ
あへぬ時は他にあり。ばば。吹うる人あり。
とやき。利谷のいりは深山奥あり。遠
浪出をなつうるとゝ。比あり。まちと
佳やき。他に茶碗やき。陶器は。窯
を〳〵べおおとてもらしまバ。〳〵吹ばかり也。
絶は吹まゞ〳〵ひまの。うちうまてかつ去〳〵べ
とてゆ〳〵ものをまバ。穴ごとに口伝有上に。
性骨がとなへをいれ〳〵と。五穴を
みにうぎ発ぶ。ひ。へよの〳〵とゞかわとはゞ
むぐ〳〵び。あ〳〵〳〵するけバ。いづまの穴も
ゆるかぶ。上をいづれまも吹あて。

呂律おのおのうつくしきはばるは。人世のもづ
や。為に失にあらずかゝやき
何ぞ多き上に賜はるゝうるはしど
も。天子の御舞樂のゝ。恭に敢ず
べし。天子寺の僧人の門徒ハ。當寺の
条によりて。園を造べあらるゝ。もの〳〵なる
乃めでたくもあらぬ。かゝるを。かゝるを
すぐれたる。たゝ。天子の一時の間とて侍る
をまうもとゝ。はあらず。六時堂のおの鐘
なり。其音黄鐘調のもとうや。宮〻暑

ず。但繁舎よりも重密舎までの中ちを
指南とす。秘蔵のうるせ。此一調ずもら
ていづれも音なもとゝ。ゑへ侍るなかと
やき。凡能のおろハ黄鐘調なるべし。
是先ゝ御子祇園精舎の世〻常住
乃壺なり。西園寺の法鐘。黄鐘調な
いとうるべしとゝ。あまの一度いつへゝし
ゝきどもうまばけるを。本園よりか
ゝづのいづれ〻ちはい浄土剛院の鐘

ゑ老。又黄鐘調や
建治。弘安ゑ比ハ。桑の日ゑ敷光いつけ
物に。しもやうもる紺乃布めゑ角んよ
〻馬をつくらうて。庭髮すゑとうじみ
をして。〻もの井好のさる次平まつりて。
歌の心をゞいとて。やうわしとけゆよ
見及び侍しなゞも。與あわてきゝかち
まてまうはしのを。老たる道志ゞもの。
そゆとゆゝか侍るや。比いつけものし
と見て。ゑ見ゝもの。おうよまわて。以前

のちなる物をおゝくけりて。先右の袖ゑ
へにあつて。みづのゝかこゞたまゝび。
ゝをつきゝし。むるを掃ゆとん書し
仔以前乘ゑ。東二條院へまゝれう
まるに。ゑ井の道ゑ墓まい。何るう侍ゑ
おゆ者と者ゝゝ。好ゝ侍ば。光のゝゝ。
宝殿不能ゑ花とやゝきゝうりゝを。ゑ
子ゞおいゝてハやゆるぞ。会佛ゑ
まのるゆ中ゝゝ。ゆゝとゑ。ゑゞや
ゆいゆぞとゆ。ゝれば。安宗ゑれゞ。ゝゝそ

やはらかうしてうつくしきを。よはゆく弱
名をも福に換して巨益あるべしと
祝ふ。梅文化の乃ばめば。何ぞりみしる
ぞもなきてこゝろを吸ひ。つぐやはんと志し
て。其梅のくゝりかゝるよつまさて。世さ云
梅乃なびやつるやとぐやはれける
あづ乃おおいどのハ。竜名さづ君也。鶴
ぬかれ殆はゆへ。とやハ降るや
陰陽所さ宗の道。鏡者よりのぐ
て。表ようでまり。ぐよづさ。

此海のいづゝにひろをしと。海よし
ちゝゝべらゝぬ。よとあるものハ
うゝること。ぬはゆも。あうとこひう殘
して。居ひるけにつゝうおへと。ひめ佐
ま。深にのしの地をまうづゝよをうん
こと。道まるまうまうう。くふ。宮殿
をなどをうへなゝでし
ゝゝゝ所やまるハ。通寒ハ道舞ハ
汐中に真ゝるゝどまをゝて。いそ
神所といれゝるに教てまハもゝ。

白きぬを千よはうすきぬ烏帽子を
ひのかのくかくれば。おとこすがたにぞいひ
ける。後鳥羽院の御あづかりと云ける。此義
とつぐかの。皇太白拍子の起元也。仏教の
縁とうこの。其後。源光りあきくのる
を後白河法皇。後鳥羽院の法皇も有。
義経蒙にをしへさせおはしまるとぞ
後白河法皇の御時。信濃守行綱。誓
言乃巻あり。くくしづ。楽府清仲論語義の
書をあつめさきて。白拍子の舞をよつこと

くかくれば。女徳の冠者と異名をつけ
まるとぞいふ。まるすして。学問をとて。
道世をくりはるを。義経初尚義。ある
ものをば。不敵もめしをきて。不法
をもはおはしれば。此信濃のごとを抜抽
しはくくかくれば。此の道。平家の後
とは。四くくは。世法といふ。
てわくくせくおくて。山伏をもことに
世くくかくかくれば。九郎判官の子ハ
くくくくて。まのもとの。補冠者義

あり。ふかく入てばゆかけるこのや。あかつき
おもてもおもてる——もり。武士のるす
るのかぶ。生仏本国おもものなて。武士な
同やてらもたゆ。はは仏ず生れつきの
おうなとの琵琶法師。学びさるや
六時礼讃。法然上人のかすを安心とも
いえまる僧。弥陀文をつめて造りてつとめ
よ。さらば。其後ゆまふ其観房こそふ僧。
もしまりをを宗て老ぬるおもり。一会
の会仏の最初や。後鳥羽院の代より

ゆ。おれ。法るす。讃を。ゆ。ぐく其観房
よ。ゆ。さるや。ふ。ゆ。の歌。迎会法。文永
の比。ゆ。上人。を。ゆ。ぐ。め。れ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

とゝぶらよはゝまおどひすげにくふ。まゝ
ゆ柳ぶけうんじしるうこ
うのゝ日の當のをとハ。ほうあさ庖丁まわせ。
ある人のもとゝすてゝいみ。き鯉をいゞ
ゝかくれば。指人ゝの當の道の庖丁をん
どやと思へどゝ。ゝもゝくうゝいでんもい
のゞゝたあ殺れくるを。別當のをとゝ
人ゝて。此雑百日の鯉ゆ。ゝ鯉ゆ。ゝ
ゝ結るべまにあゝず。ものゞてゝ指ん
とてきゝれけるゝみゞゝくつきゞ

ゝ真あゝて人どゝゝ思へゝ。ある人
山ゝ出のをとゝ。ゝゝゝゝさゝけ
ゝきゞ。ゝやうのゝをとのれゝ。ゝゝ
光ゝゝゝゆきゝぬゞきゝ人ゝゝゝゝゝん
ゝいひゝゝんゝ。ゝまゝゝうゝん。何解。
百日の鯉ゝきゝんゝものゝゝひたりゝお
ゝゝゝ光ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やうにとりあつまりてさまざまに降よられど
も。こゝをこゝにもてあそびて。さまざまに
よし。人は物をきゝたがへつゝ。
て。是を去るゝ人。の志や。
勝むこゝしてこれを。勝負の
負方ごとにつけ。
すゞゝ人世に智先能をもてるものや。
ある人の子の。んぢゆうなるあゝ。
なのおもゝ人ものいふて。まゝの文を
ひぶゝわし。けるしをきこゝしう

どゝや。尊者のおもてに。ゆゝ。ゆゝとも見
えしや。又ある人の神つて。琵琶法師
乃ぶゝをきゝん。て。琵琶をめゝよ
さるに。どうのひゝうおもうゝ。ぶ。泣りて
つけ。ゝと云に。ある男出申まあゝ。
ずもんあるゝず。古きびはゝの柄あやゝ
ふなのれば。仏なおゝしゝう。琵琶
ゝずのゝに。ゝゝ。ゝゝ法師の琵琶。其
沙法ゝ乃ばぬゝ。ゝゝ。ゝゝに。ゝゝ
よゝゝやゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

万柳ひめもの木とうやうにて。よろづぬ
物よとぐ。ある人作り庭れ一。ひろた人
よこてのろすもとぶ〳〵みしやろくみゆるせ
ひの者ものぐまの〳〵と思ひ〳〵。何ろすま
おく〳〵まうて〳〵。人ぶ中ろずうやく〳〵
ち〳〵。ここ陸ふをくまるく〳〵ん。まる吉ぐ。勇
女夫のあれは〳〵人こうこうこ陸ぶまを
とにやうくかさらすもま人ぶ。ものうるぶ
一まのいこ一きぐ〳〵。ぶこつあ〳〵もの
や。ぶまのまやぐる。まやぐ。ぶきこ陸ぶまを

ぶきにこ人ぶ。ぶ一衆一て。人ぶまい
ぶ一ろにぶろうりまあり〳〵
人の物をかるに。吉〳〵ぶまあ〳〵ぐ。
ありのやよいりんは。おこぶまの一とうや
心まぶをぶをやうにうんをおとたるよ
ぶ〳〵ぶるまぶ。こうやこうこうまぶはぐ
ちとぶたてやもう〳〵ん又おこものよ吉ぬ
人もまぶのまの〳〵ん。う陸〳〵ろうよりき
ぶを〳〵ん。ぶ。おぶ一〳〵きこ一ぶ
ぶし。人ぶいまぐまぶ及ばぬぶを力ぐ

きやうまへまで。さてそ其人のるおは
ものしはなどがちひやりとすれば。あ
なるほどのあるにのると。よーしとは
りやるこそいづあまりしかしせまるちぬら
あーまあまあ。おのづからやまもまあちり
もあれば。光れおらんぬやうよ者なさを
さらん。あーらんべまのことはうやう
があ。ものきれあ人のまるや
ぬーまあまあ。すぐろまあ人。ふお
あまあまのまあーあるじしあるはまう。

道行人みどりすちの。拍子ろうやう
ものも。人びとのきのびにえびふりも
まみ。まのすまあで元たーらぬらら
まあーくくーものや。又鏡ものあ色かるら
あまれに。ものびまつまくうる。能
うあまるらあーおーうばうつ
ばーまー。屋やよくれば。ばいる。安お
がまろう。今このおしまやにまり
うのあ。ふふふとのーなまのやあん。
はあぬーあーまーうば。曾のうちに。

いつ年のことなのをしらぬ事
毋はよ。おぼえと云はあが大社をうつして
めでたくつるをまつおが。志ごおをまつ
とうやおるこふおまぶ。秋の比堂海上人
其かと人をまつはうれて。いざめへ出雲
おがみに。うい。きちいわさをんとこ。其し
まてゆめ。あるに。名ねみ〳〵。ねへ〳〵
信おこて。そが。うおまる柳子まさいめ。
そなまてうしろはさに。こちうりくれば
上人いみ〳〵。ねじ。てあまめでくるや。此
柳子のこちやうりもあづ〳〵しる。あるかた
あんと涙ぐみ〳〵。いうり屋原孫侍
乃事ハ。ハ。ハ。覚じ。もづめまや。先下ちか
もうへば。名あやし。みて。深ま地にも
まちくるわ。赤乃はるにかるんまで
ふる。上人まを赤しーげ。おまを
名ぬもちぬべ。彼。新ふる赤おまをよ
て。ぬ。法社柳子のさて〳〵れやう。こて
あ〳〵ひあること。た。法〳〵んちと。まり
ぐやといれくまば。そ事まゆ。さが形民

わ〳〵はべどもの仕りける。この姓にはしも
ものしてはべりよりて。まへなるしてこまれば。
上人の感涙ながしづつよまるおにくり
物語りまゆるものハ。そてはさ横横
物にもるべまるのや。巻巻物まどハしてさの
にまるまて。木のあいだよりの紙れひとを通
ーてゆひはく。和まるてはさよ巻
さる巻ところおずよしと。三條右大臣殿
作給はしき。勘解由小路の殿の能
のハ〳〵ふうつまたてさるなうまるる

あり。お横横にまへ〳〵れ侍や巻
作給まを巻おず自撰にて。七箇条を
ものめまるるあり。馬義さもること
あるうどまや。其〳〵をおりて。
自撰にあるもあり
一人あまりて。おのれありさ〳〵
最勝光院の名すてなのこるるまた
〳〵ものしたるよんて。と二度馬はは
まるものあるば。馬うのれ〳〵義べし。
ばーんねてまてもとまるに。又百

をはじめとぐむるにつて禹とひのくちの
して乗る人流土の中よりそびへて
河のあやまちばるるとて人あり越び
一當代いまだ捨ておりまして比
万里小路殿にまゐり堀川大納言殿
白張一枚しゆばうしへ用あり
こゝ参りうかゝ。稀接の巻の巻
とゝろひろげおて。こゝと法にまて。髪
の朱うどのことを悪みを云文ば出覚
ぎゝれこまるあうて。つおなは勝ずを

どまは勝じおはれぬや。まゑよゝく
ひまみこゝと作るまて。来るまうと
おおを殺さお。九の巻をそこの雑
み侍るとやうわしたび。あまこう捨し
とゝゝ。まてすいるもの。のまハ
呪どもゝ巻の子まれど。者お人は
いはゝうのるをまいみゝ自撰し
たるや。後者九おこのに。袖と後
ゝ一首のうちよ。あゝうちんや。
宝おはにより者おおもれ。ものう

秋の暮乃やまおろしさむしとかなどすのこを
おろいでゝ月をながめ袖ひゝたゆゝしく
侍れば。何ゝらさびゝしきやさき
ゝるゝを。時よりあるゝゝ。ゆ歌を見
侍を道の冥加なるべし。こる運やなど。
もゝ〳〵ゝゝゝ

よう。いるあ歩のはの。光来まし
ぬりまをび不思議。あけのみや鐘四立
歩不思ゆ。さぐまくやゆるかや
一人あまく人まれて。三階延れの事
侍ーよ。横川の学行堂ぬうち。
殺生禁院とらけるゆる。米額あり。供理
ひぬのあれぐうぐびあて。いまぐ決
もずもや。僧ちわと。堂僧るしあや
侍ーよ。りぬあらば。裏きあるべし。
供理あるばうぐきるべ。といれ

うわに。裏ハ茶つもり。金の箱うて
りぶもげあるよ。ものごとて。名
見侍ーよ。りぬ位署名字。自号。
はぐうみ。侍ーぐ人。拾奥よの
一 聚黄龍庵寺。道眼重法号もし
よハ災と云るを云れく。見やおぐ
おるといひ。ぬ。に化あ光ぐばち
しうぐよ。ぬ内よりと。見しやと云
おしるぐばいみ。ーく感じ侍おま
一 貫ぬ侍云にあまるて。お拾家水

凡僧一人。いまだ[illegible]そなわらざるに。僧正
えらびて僧一人。陳[illegible]おなじく僧赤
みしば。法師[illegible]をかくして。まとめは
[illegible]。同じ[illegible]大衆あつまりて。
えもとめあまずまもりひてとりくく
ていづくにか一人あまりびしたれ
もとめきおのおのいづくにか一人かへ
りくくおそれ具一てしてでめ
一二月十五日。月あつきまゝうちるけ
てふのまにまうでくうしろよか

のてひとりかたらひくくして。聽や
し侍一人。優なる女の海のうちひ人
ようとしてうるがうちまのて練まのう
まげ。にらひまげ。ひとうるげうまさば。
びんあ一とさひくく。まのきうて。
まゆのうちてあるで一撫まんばうち
ぬ。其後あるに侍はのみるを女房の。
そぐろ[illegible]れしつしでは。先下に
女なる人におり一くおとくんおとく
うてまうるとをくく一。仕まつ

と恨みなる人もあるべしとのつゝまれ
出しさるに、ゆゑいはれぬ情ゝもあ
りてやみぬ。比るの後さき清しかば
藤太夫の妻ゆつぎぬ肉よが人の
ゆ覺じ去りて。さすがなる女房とつ
ゝうしてゝぶしわて。びんこゝを云
集まるどうくんものぞ。そこまを糸りて
やうに無あんゝて。ゆゝわれくるとぞ
八月十四日。九月十三日。妻宿也。此宿
清明あれば。月を歌ふ夜歩も

去のぶの浦の蛍のあるめも。いまゝ。ふ
の山まもる人去げの。ゝんは。わかをゝ通りん
いの人色ゝそ。海ゝ。ひ表。おふるしぐ
乃。去りしがゝきゝもおおのゝめ。おやり
ゝゆゝて。ひゝつるまあへまをへ。ん
りもやばゆうゆめづ。世にあわ偏るせの。
すげ。あゝ。老法師。あや——の者妻人成
ゝゝも。ゆぎゝ——きに。つゝ。そゝふ。あゝ。ば
まゝど。去。ゝ。ゝ。ゝ人何。ゝ。ものゝ。ゝ。ゝ
いひ。ゝ。——て。去ゝ。れず。去ゝぬ人。ゝ。ひ。

まて来てこんあいなさよ。何るさや。夜
どる云のまよまん。夜月のつゝまを。
ろとて陸山の奇ぞまや。あれやさゝりこそ。
つれもぬ云のまよてもあゝめすぐゝ隙
にの人のぬすのまれ月こんうていづま
こまるまおろでし。よきめをゝんよつけ
てまや。品ゝぶゝわのてすゝて。夜を出ぬん
男ハうくあやゝきまおあよ。あゝ雅
まよろゝでおまはるんやるとんまをゝら
もゝゝ。わずあハむゝひねゝゝんま。

新りづゝ。ゝ。ゝ。

きまゝゆゝばる雑ハ。常住平生の会よ
ゐるて。生の中にあゝ〳〵のるを成じ
て後。家にそなを地ちんとおもかぶ。
病ばうまゝ死いよ行ぞむ時。に彼一事も
ばゞと。ふかれるて。夜月の懈怠な
時〳〵。此をいるゝとちゐりて命をまゝ
ゐとば。家をゆよつまて。此るはあ。を
こゝゝばばじてんゆゝ彼れをおこまゝ
めど。おてをもちゆきば。此まあゝず。
如みゞ〳〵てりそてぬ。此さゞひのみあろ

あゝゆ。此ろうよづくゝりてゞはうまゝく
でし。に彼とばじして後。地ありて。道
ゐあゝりんとまば。に彼つゝづゝびめ幻の
生の中に。行るをちを出て。すゞゝ二彼
地を想也。に彼ふまゝゝば。安い生孔
すと去て。るをまゝづゝび。あに家
るを取ハ〳〵て。そをゆむのゆ時。さハか
ゝゝに泣まて。いまあゞゝきづゝや
ゆゝこてをへゝ。達明をつゝゝあゝ。
ひゝへを若樂の彼あや。家をいふこゝみ

妻をもつまとあり。是ことを来ること。やむ時
あり。一条欲するに。一に名聞に二種
あり。利欲と才芸とおなじ。名聞とは
欲。三つの味あり。一条の物ぐるひ。二つの
ものず。是顔淵の相よりおこりて。ゆる平
のうづ。これあり。もとめばんよりきづ
ハよりおかし。人色以にかゝる。仏ハ夢
を説すゆゑんと。ふ。ゆゑに仏すは
人是をもつ。ゆゑ。又問人も何
とゝして仏にはなりがたんと。ゆゑ又仏の

をしへによりてをうるものとこそふ。又ふ
教ハをる仏をば。ものずをしへ。ひとをる
と。又是をうるをもつ。又はをの仏乃ゝ
をうるをもつて成ぜるをもつと。又ふ其
教をば。ひとをる本一乃仏ハあるをる仏
すゆゑ。ものゝ時。なをものをもあり
ん。ようやゝあんん。といへゝやふ。
問つめゝ。これをいへゝをもつ仏ハ
ゆゑ。諸人をもつて興一乃

這兩帖書因兼好法師遊於〻日法師向
暮陰筆下寫情者也頃泉南七年処士
其跡落〻草庵而孤寂〻廬無
說莊生〻自逸且以晴日對三子戲論
要加之注將也以命於工諸於梓而付
夫三三子矣新句讀情閑以下俾予糾
之予坐好其志志其醜卒加校訂而已
復恐有其遺漏也

慶長癸丑仲秋日　　黃門光廣

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan